

王朝女流日記における境界と心のバランス

‘BORDER’ AND EMOTIONAL EQUILIBRIUM IN THE NARRATIVES OF HEIAN PERIOD MEMOIR LITERATURE

John R. WALLACE*

Memoir literature of the Heian period was produced by women writers awkwardly positioned within the imperial court they served. Though they were critical for the production of art that bolstered the aristocracy’s self-conscious effort to advance and enhance Yamato culture, they were shut out from the political center of that same society. Their private anxiety deriving from a polygamous marriage system and a further anxiety deriving from this unsecured public position set the scene for a literature that focused on dissatisfaction and a sense of isolation.

While there are important similarities between *Sarashina nikki* written by Sugawara Takasue’s Daughter and *Kagerô nikki* written by her aunt Michitsuna’s Mother, if we consider these texts in terms of the protagonist’s attitude towards her fate in life we can determine interesting differences. In the final analysis, the protagonist of *Kagerô nikki* appears to consider her

* ジョン・ウォーレス スタンフォード大学でPh.D.取得。ウイスコンシン大学助教授を経て現在カリフォルニア大学（バークレー校）客員助教授。王朝女流文学を主たるテーマとし、日本語の論文に「英語圏における女流日記文学研究」（『国文学—解釈と鑑賞』1997年5月）などがある。

fate to be fixed. She speaks discontentedly about this certainty. The protagonist of *Sarashina nikki*, on the other hand, even if she complains about the course of her life as well, holds to a belief that some agent may yet reverse her fortunes. Thus the two memoirs afford fairly different reading impressions, with *Kagerô nikki* sounding the more bitter and *Sarashina nikki* sounding more naive and optimistic.

This difference can be seen in the texts' treatment of "borders" as well. In *Kagerô nikki* we have several instances of a protagonist that goes to the edge (Jse: *hate*) of a known territory, contemplates the border of that territory but does not in fact cross it. In *Sarashina nikki* there are a number of journeys, physical and spiritual which either cross boundaries or intend to do so. It is this latter text which embraces hope in a way that the former does not.

My essay will explore *hate* as a key term in *Kagerô nikki* and travel as a key motif in *Sarashina nikki* in order to illustrate the difference that these memoirs evidence towards borders and the value of crossing them.

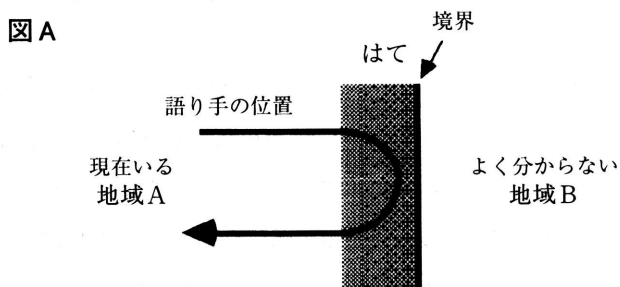
私の専門は王朝女流日記文学ですから、今回の国際日本文学研究集会のテーマが〈境界〉だと聞いた時、すぐ頭に浮かんだのは藤原道綱母の『蜻蛉日記』でした。私はその内面的な、謎めいた〈境界〉について試みてみたいと思いました。道綱母は〈境界〉に対して非常に緊張感があるようです。なぜならばそれはたぶん道綱母にとって境界の向こう側に位置するものが語り手にとってよく分からない、心理的に不安を抱かせる仏教の世界（＝貴族社会から外れた世界）や将来だからです。

そして姪に当たる菅原孝標女が書いた『更級日記』を連想しました。それについても少し言及したいと思っています。『蜻蛉日記』は王朝女流日記の中で最も感情的な日記だと言えると思いますし、『更級日記』はその逆で一番平和

で穏やかな印象を与えるものです。しかも、この二つを比較すると、アメリカ人には『更級日記』の方が好まれるようです。この二つの日記の〈境界〉に対する意識を考えると、この感情的な違いの根本となっている心理構造も、また、アメリカ人のはっきりした好みも説明できると思います。今日の発表はそういうものです。

『蜻蛉日記』を初めて読むアメリカの大学生はだいたい話し手の神経質な声に気になります。これはどういう訳かと言いますと、話し手が不安な境界に近づいた状態そのままです。この不安が原因となって話の中で登場する道綱母の言葉が出なくなったり、足や腕が動かなくなったり、目が物を見ても何か分からなくなったりします。Seidensticker氏が翻訳した『蜻蛉日記』の序では、これらの現象を hysterical jealousy (狂ってしまうほどの嫉妬) として説明していますが、私は、嫉妬というより、もっと一般的に自分の将来に対する怖さと戦いながら語っているから、その為に神経質な話し方になるのだ、と思います。『蜻蛉日記』の読者はその戦いと出会います。

この不安な空間がどこにあるかを図にすれば次のようになります。



〈地域 A〉は語り手がいる所で、境界の向こう側の〈地域 B〉は語り手にとって分かりようのない世界や将来です。灰色のところはこの二つの地域を分ける境目に近い空間です。境界に近づけば近づくほど話し手の声が緊張してきます。それなのに、『蜻蛉日記』の語り手はだいたいこの空間の中にいつも身を置いています。この構造は日記の中に何回も繰り返されて出てきます。語り手

がこの〈地域B〉に入る例はありません。

私はこの灰色の空間を「はて」と称したいと思います。白川氏の『字訓』によると、「はつ」は「ことがすべて終る」と定義されています。「端」の同系の語、「端」の活用語ともされています。または、「終ふ」の「尾」の活用語であろうかと。また、「ふち、はた、へた」と同系にされたこともあります^①。

『蜻蛉日記』の場合、この言葉の使用率が他の日記より高いのです。一方で道綱母は「はて」を平安時代の仮名文学としてごく普通に使います。つまり、プロセスが完全に発達して自然に終わること、特に時間の経過の場合に多く使っていました。けれども、もう一方では、『字訓』で説明された、次の段階を予想しない「端」や「尾」の意味にも使っています。

たとえば、この日記の中巻に例があります。語り手は自分の結婚生活に絶望して京から出て鳴滝般若寺に到着し、庭の説明をする箇所です。

牡丹草どもいと情なげにて、花散りはてて立てるを見るにも、「花も一時」といふことを、かへしおぼえつつ、いと悲し。(牡丹がなんの風情もない姿で、すっかり花びらを落して立っているのを見るにつけ、「花も一時」という歌を繰り返し思い浮かべては、ひどく悲しい気持ちになる。)^②

これはあるプロセスが終わることを示すよりも、終わってからの、むなしい状態を主張する「はて」の使い方です。『紫式部日記』の場合、「はて」はある時間が終わって次の段階に進むことを示すために使っていますが、『蜻蛉日記』の場合、そのような次の段階の序になるようには使われていません。

特にこの日記の終わりにはこのような「はて」は非常に効果的なところを占めます。次は『蜻蛉日記』の最後の段落です。

暮れはつる日にはなりにけり。明日のもの、折り巻かせつつ、人にまかせなどして、思へば、かうながらへ、今日なりにけるもあさまじう、御魂など見るにも、例の尽きせぬことにおほはれてぞはてにける。京のはてなれば、夜いたう更けてぞたたき来なる。

〈年の果ての日になってしまった。明日の元日の引出物にする物を、折ら

せたり巻かせたり、侍女たちに任せなどして、考えてみると、このように生き長らえて、今日まで過してきたのも、まったく意外で、御魂祭など見るにつけ、いつものように尽きせぬ物思いにふけているうちに、今年も終ってしまったのだった。ここは京のはずれなので、夜がすっかり更けてから、追儺の人たちが門をたたきながら回って来る音が聞える。)^③

この「暮れはつる日」は一年の最後の日で、大晦日です。この日になって語り手が考えるのは「ああ、また一年がいたずらに終わった」ということです。全く先のむなしい牡丹草のようです。そして、時はその果ての日の果てです。更に、地理的にも場所は京の果てです。昔、彼女は藤原兼家の妻で世の中の一人として数えられた頃と違って、今、その関係が冷めたので住所も変わって「京のはて」になりました。

要するに『蜻蛉日記』の〈境界〉とは越えられていない境で、地域の外れを示すものだと言えると思います。

ところが、菅原孝標女が、それから半世紀を経て『蜻蛉日記』の最後の段落の「はて」を出発点のようなものに変えました。『更級日記』は「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」^④から始まります。道綱母の「はて」は時間やプロセスの終わりに注目しましたが、孝標女は「はて」を離れたところから真ん中への旅の出発点として言いかえました。そして、『更級日記』の最後の所、やはり『蜻蛉日記』の最後で三回も使われた「はて」の響きも感じられますが、しかし、ここに現れる「はて」は孝標女の言葉ではないのです。よく手紙を交わしていた尼の歌の中です。

「世のつねの宿の蓬を思ひやれそむきははてたる庭の草むら」〈あなたは、人に訪われぬ身を、蓬の露に濡れながら泣いているとおっしゃいますが、まだまだそれは世の常のお住まいです。どうぞ私の住まいも思いやってください。すっかり世をそむきははてた私のところには、まれの人も絶えてなく、庭の草むらは荒れほうだいですよ〉^⑤

道綱母の最後の段落の「はて」は「今年が終わっても別に何も変わりませんで

した。来年になっても又同じように『尽きせぬ物思い』ばかりをするでしょう」と言うような、むなしい終わりを暗示しますが、孝標女が使う「果て」は『更級日記』の最大のテーマと一致しています。「この世に背いて仏様への関心を高めればたとえ人生はつらいにしても、いつかその仏様への信頼から良いことが始まるでしょう」というのがこの日記のメッセージともいえるでしょう。尼の歌ばかりでなく、『更級日記』の最後の場面は寂しい雰囲気沈んでいるにしても、尼の、語り手への返事は一方では慰めのひとつだし、また一方では希望を抱く信者の言葉なのです。やはり、『蜻蛉日記』の「はて」のような辛さはそれほどないのです。

「はて」は『蜻蛉日記』のキーワードの一つですが、『更級日記』の場合は「はて」よりも「ゆかし」から生まれた旅に出かける気持ちがキーです。「ゆかし」は「ゆく」の形容詞化した語で「良いことが期待される所へ行きたい」という意味を持ちます。この言葉は『更級日記』の中で12回も使われているのに対し、3.3倍の長さを持つ『蜻蛉日記』には一度も現れません。

それで、『更級日記』の〈境界〉をこのように考えました。

図B



『更級日記』の中の旅人は非常に簡単に境を越えます。たとえば、まだ子供の頃、話し手が平安京に上る途中、武蔵野に入ってその国の由来を聞きました。その話は帝の娘についての話ですが、その娘が庭を眺めて、ある特別の形をしたひさごを見て、それに興味がわいて庭で働いていた男の人にいろいろ聞き、

そのうちにその男に誘われて一緒に逃げてしまった。それで、図に書いたように勢多の橋を飛び越えて今の武蔵野まで走っていきました。天皇は心配するばかりですが、娘が楽しく新しい生活をしているようなので許しました。

この話は『更級日記』の中で詳しく伝えられています。この日記の基礎構造とも言えるかもしれません。つまり、新しい所に行きたいと思ったら行った方がいい。行けばよいことがあるからです。『蜻蛉日記』のように境を越える怖さはどこにも見あたりません。

しかし、本当は、日記の中の出来事はこんな簡単に進みません。あこがれていた京に着いてから親しい人々が次々に去ったり亡くなったりします。そのため、東山に移った事もありました。東山はある意味で京と仏教の世界の間の仮の地域に当たるようで、そこで詠まれた歌、たとえば「奥山の石間の水を」の歌は日記の中でもっとも美しく落ち着いている歌です。子供の頃から期待していた京に住むようになってから人との別れは実に多いにしても、転居で不安な思いをするより、その変化を受け入れて落ち着く語り手です。

日記の終わりの方、仏様が語り手の庭に来て後で迎えに戻る約束をしてくださった夢を見て、その夜からずっと仏が又現れる夜を待ち続けます。向こう側の仏教に対する態度は道綱母と完全に違います。怖くないのです。

『蜻蛉日記』の語り手の仏教に対する態度は『更級日記』の語り手の態度よりずっと揺れています。彼女は鳴滝般若寺に籠っていた時期がありました。実は、これは『蜻蛉日記』の中ではるかに一番長い部分です。夫の兼家から離れたたい気持ちで行きましたが、しきりに兼家からも親類からも圧力をかけられて結局元の家に戻ります。図Aのように境界に近づいてその不安から興奮し、心も揺れますが、最終的には、また元の状態に戻ります。

アメリカ人としてこれは面白くないのです。特に若い学生の場合は、やはり、自分の人生は自分でコントロール出来るような話を聞きたいわけです。そうでなければ逆にそのコントロールが完全に取られた悲劇的な話でも面白いかもしれません。どちらにしても、仏教の影響を受けた王朝文学の中にはあまり見あ

たらないテーマですが、なによりも仏教に関心を抱いた『更級日記』の中には不思議にちょうどそのアメリカの学生が好む、境界を越えて将来に向かって歩む力が見られるようです。

結論ですが、『蜻蛉日記』の神経質な声は越えがたい境のあたりにある、不安な空間（「はて」）から出てくる声です。嫉妬が抑えられなくてそうなるというよりも向こう側が怖いからだと思います。そしてペシミスティックな平安時代の女手おんなでの文学の中に『更級日記』があってそれも話の筋から言えばペシミスティックですが、それでもなんとなく落ち着いている日記です。それがどうしてなのかを探り出すとすぐには答えは見つからないのですが、又〈境界〉から考えれば語り手の悲しい言葉の裏にはかなり陽気な態度が見えてきます。〈境界〉の研究はこの日記のX線と呼んでは言い過ぎかもしれませんが、この面から研究を更に進めれば『蜻蛉日記』と『更級日記』の一つの大きな根本的な構造の違いが明らかになってくると思います。

簡単ですが、これで私の発表を終わりにします。

注

- ①白川静『字訓』（平凡社、1995）。
- ②菊池靖彦、伊牟田経久、木村正中『土佐日記・蜻蛉日記』新編日本古典文学全集、第13巻（小学館、1995）、228頁。現代語訳もこの本による。
- ③同、363頁。
- ④藤岡忠美、犬養廉、中野幸一、石井文夫『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』新編日本古典文学全集、第26巻（小学館、1994）、279頁。
- ⑤同、360頁。

討議要旨

湯沼誠二氏より、『蜻蛉日記』と『更級日記』との比較に関して、二人の作者の境遇、すなわち個人的な生活背景が内容の違いとしてでてくるのかどうかという質問が出された。これにたいして発表者は、『更級日記』は『蜻蛉日記』と似て暗い境遇を語っているが、『蜻蛉日記』の作者が、年をとり、心がたかくなになり、周囲との距離をとるようになってゆくのに対して、『更級日記』はよりオープンで、ほかの日記には見られないある種の単純さがあるところが魅力であると述べられた。

また、川村裕子氏より『蜻蛉日記』の研究者としての立場から、『蜻蛉日記』の作者は、境界を越えずに戻ってくる強さがあると考えられることも可能ではないか、すなわち不安な語りができる著者には客観的な視点が確立されているのであって、あえてそういう表現をとったと考えるならば、戻ってくる強さとして逆にアクティブなものと捉えることもできるのではないかという意見が提出された。さらに川村氏から、「はて」という語を分析する場合、花がすっかり散ってしまったという外面的な用例と、自分の心の中における内面的な用例とは分けて考えてみると面白いのではないかという提案があった。発表者は、たしかに元に戻って道を探すというのは一つの強さと考えることができる。外国人には前向きの姿勢を評価するきらいがあるが、道綱母の正直さを強さとして捉え、評価する考え方をもつものもいると述べられた。